

# 南西カリマンタンの移民と社会変容

太田淳 (広島大学)

上田：それでは、続きまして広島大学大学院文学研究科准教授・太田先生の発表になります。太田先生、よろしくお願いします。

太田：皆さま、こんにちは。広島大学の太田と申します。今日の報告では、今の西カリマンタン州の南部を中心とする南西カリマンタン地域を対象とします。西カリマンタンでは内陸部あるいは北東部の華人コミュニティの研究が進められていますが、今日はそれと違う海岸部社会の話をしたしたいと思います。

## はじめに

今回のシンポジウムの大きなテーマが移民ですが、私はここで移民、国家、在来住民という3つのアクターを取り上げてみたいと思います。なぜなら、移民がある地域に定住し、コミュニティやネットワークを形成するにあたって、国家が非常に重要な役割を果たしたと考えられること、さらに在来住民との関係も同様に移民の活動に非常に大きな影響を与えたからです。この3つのアクターが絡み合っ、その地域社会と外部社会の接続があったというのが私の考えです。この例を南西カリマンタンの前近代から近代への移行期、特に今日は18世紀後半から19世紀半ば頃までに焦点を当ててお話ししたいと思います。

この地域には、数度にわたって異なる種類の移民が来ています。まずスカダナが南西カリマンタン最初の国家として1500年前後に設立されますが、この国家は移民によって建てられました。南西カリマンタンはスカダナに限らず、それ以外の国家も移民によって設立されます。ジャワ人や後にはマレー人やブギス人等々が国家を設立するのですが、在来住民であるダヤック人は、国家を建設することがありませんでした。

この地域には、島嶼部東南アジアでは非常に広範に見られる現象ですが、特に18世紀後半から海洋移民が目立って来ます。19世紀前半のオランダ語資料から、オランダ人や恐らく現地人も、オランダ語で *strandbewoners* (直訳は海岸居住者) などと呼ばれる海洋移民をほかの住民から区別して捉えていることが分かります。それによると、彼らは比較的短い期間数世代海岸部に住んでいて、海に関連した独自の生活様式を持っています。面白いことに、彼らはマレー人とも呼ばれています。彼らは非常に出自が多様で、一部の住民はブギス人であるなど書かれているにもかかわらず、彼らは総称としてマレー人とも呼ばれているのです。ここから私は、海岸部に居住した人々たちがしだいにマレーを名乗るようになったのではないかと考えています。

本報告では、この時期の南西カリマンタンにおいて、在来の住民であるダヤックおよび海洋移民が、国家とどのような関係をつくり出したかということを述べたいと思います。取り扱うのは、主に海洋移民が活発化する18世紀半ばから、植民地支配が浸透し始める1850年頃までとします。

## 支配者の到来と国家の設立

スカダナ王国は、中東部ジャワを支配していたマジヤパヒト王国の王子である *Prawi Jaya* によって設立されました。彼はすぐに海岸部に港をつくり、沿岸貿易や河川貿易によって国家を発展させました。その後のオランダの資料では、この王国は、ジャワ人でなくマレー人またはムスリムの王国と記されるようになります。おそらくジャワ人が最初の王国を設立したあと、マレー人がおそらく商人としてやって来るようになり、比較的容易に

ジャワ人の支配層と混淆したのではないかと考えられます。そしてしだいにジャワ人というアイデンティティを失っていったのではないかと私は考えています。この王国では、16世紀半ばに第7代王がイスラームを受け入れたとされています。

## スカダナによるダヤック社会の支配

スカダナ王国におけるダヤック人支配についての資料は、1840年代のものが最古となります。従って今から述べることは19世紀の状況でしかないのですが、おそらく16世紀以来の支配体制をかなり反映しているのではないかと私は考えています。王は地域を14に分け、それぞれに自らの側近や宮廷官僚を首長として派遣しました。ダヤック人も自ら選んだ首長を持っていましたが、彼らは明らかに地域支配構造の中で、中央から派遣された首長よりも下位に位置付けられていました。ダヤック人は様々な税や労働供出などの義務が課せられましたが、マレー人にはそれがほとんど免除されていました。

マレー商人は米や塩を中心とする生活用品・必需品を外部から輸入して内陸にもたらし、ダヤック人が集める鉄や籐といった内陸部の産品と交換しました。オランダ人官僚は、この交換が非常に不平等であったと記しています。ダヤック人は市場価格よりもはるかに高い値段で買わされているとして、彼らは常にマレー商人を強く批判しました。

ダヤック人はこのように、政治体制でも経済的にも従属的な地位に置かれているわけです。どうしてこれがあり得たのか。ジェームズ・スコットという研究者は、大陸部東南アジアでは海岸の国家支配を避けるために内陸部に移住した人たちがいるという議論をしましたが、ダヤック人は必ずしもそうしたモデルにあてはまりません。資料を見ると、ダヤック人の生活がマレー人のもたらす輸入必需品に強く依存していることが分かります。飢饉のときにジャワから米がもたらされたために被害が少なかったとか、婚礼の贈答品として使われるゴングが中国産であると非常に安く済むといった記述があり、ダヤック人が様々な面で輸入品に依存していることが分かります。この輸入品に対する需要と必要不可欠性が、ダヤック人が従属的地位を受け入れることにつながっているのではないかと私は考えています。

先述のようにジャワ人の支配者は、おそらくマレー人と混淆したのですが、彼ら支配者たちは、自らとダヤック人とは厳密に区別します。彼らはこの区別に基づいた支配体制をつくりました。ところがムスリムに改宗したダヤックの中には、支配的な地位に就く者がいるという記録もあります。つまり、マレー人とダヤック人との区別においては、イスラームを受容したかどうか重要な指標になっていたようです。

## 海洋移民（1760-1780年代）

このような状況下に、1760年頃から海洋移民が増えてきます。今から述べることは主に1820年代に作られたオランダの調査資料に基づきます。海洋移民は特にシンガポールのすぐ南にあるリアウ諸島からやって来ました。リアウは1760年頃から、東南アジアと中国を結ぶ貿易の中心地の一つとして発展しました。そこからマレー人やブギス人が東南アジア各地に貿易に出て行き、その一部が取引地に移住しました。スカダナもそのような移住先の一つであったと言えます。移民は主に海岸部に定住し、貿易に従事しました。

この状況は、当時の中国と東南アジア間の貿易の発展と結びついています。18世紀半ば頃から中国の経済先進地域、特に揚子江の下流地域や北京では、胡椒、錫、燕の巣、海産物、森林産物などの東南アジア産品への需要が拡大しました。これらの地域で消費社会が発展するにつれ、このような東南アジア産品も求められた訳です。

スカダナに定住した海洋移民集団の多くは、海賊の経歴を持つリーダーに率いられていました。例えばグスティ・バンダル（Gusti Bandar）という人物は、もともとカリマンタンの小王国の王族でしたが、リアウ諸島に移住してそこで海賊グループを設立し、1760年代

にスカダナに移住しました。海賊という語はオランダ人が好んで使用しますが、実際には海洋移民は貿易も活発に行っています。リアウを中心とした貿易が活発化するにつれ、彼らはその産品を集める拠点に移住しているのです。彼らの中には、王族と婚姻関係を結ぶ者もいました。

ラジャ・ムサ (Raja Musa) という人物はシアク、スマトラ東海岸にある王国の王子でしたが、国内の勢力争いに敗れると国外で海賊集団をつくり、1765年にスカダナ沖のカリマタ諸島に移住しました。シャリフ・アブドゥルラフマン (Sharif Abdurachman) という人物は、ポンティアナック王国の設立者です。彼の父親がアラブ移民のイスラーム教師であったことから、この国家におけるアラブやイスラームの影響を指摘する研究もありますが、私はポンティアナック王国の設立は、海賊活動に関与する移民集団の活動の結果の一つであったと考えています。このようにこの時期の海洋移民は、自ら国家を設立したり王族と婚姻関係を結んだりして、比較的国家との関係が強いように思われます。

## 1780年代のリアウ陥落とその影響

1780年頃までは多くの海洋移民がスカダナに定住しましたが、1780年代にこの地域に大きな政治変動が起こると、移民のありかたも変わってきます。リアウの発展が自らの貿易活動の妨げになると考えたオランダ東インド会社は、1784年にリアウを攻撃しました。その後も両者の抗争は続きますが、1787年までに、スルタンを含むマレー人やブギス人の有力者たちは、島嶼部東南アジア各地に移住しました。その一部がスカダナに移住して貿易を発展させると、オランダは1786年にポンティアナックと手を結んでスカダナの町を攻撃し、破壊しました。これにより、スカダナの支配者や住民は内陸部に移動しました。P. J. Vethという19世紀のオランダ人研究者は、この出来事がこの地域の暗黒時代の始まりだと述べ、今もこの考えは広く支持されているように見えます。

しかし、実際にはそのような暗黒時代ではなかったということを私は2010年の論文で述べました。スカダナの代わりにクブ (Kubu)、シンパン (Simpang)、クタパン (Ketapang)、クンダワンガン



地図

(Kendawangan) といった町が台頭し、貿易はむしろ活発化しているように見えます。そして再び様々な海洋移民がこれらの港町に来るようになり、だんだん自立化していきます。

## 国家と海洋移民の関係 (1780-1820年代)

この時代の国家と海洋移民の関係をまとめてみたいと思います。海洋移民の役割としては重要なのは、貿易の促進です。彼らは河川貿易にも沿岸貿易にも関わります。その時、例えばカプアス川やランダック川における河川貿易の場合のように、移民集団の間で競争

が生じることもありました。このようなときに、移民集団は国家や地域有力集団とのつながりを利用しました。先述の河川貿易の場合、ブギス人が支配者層と結びつこうとしたのに対し、華人のほうは金鉱採掘によって有力化していた上流の華人共同体と協力しました。この結果、最終的には華人が勝利し、河川貿易を掌握しました。

また、海洋移民の中には、特殊技術によって現地国家に貢献する者がいました。ナマコ、燕の巣、海亀の採取には専門のグループがいたことが分かっています。

海洋移民の国家に対するもう1つの重要な役割は、軍事力の供与でした。周辺国との抗争がある場合に、国王はたびたび海洋移民に船や兵士の提供を依頼しました。先ほど述べたシアク人集団は、頻繁に軍事協力することで知られていました。面白いことに、オランダ植民地政庁も彼らの軍事力や知識を利用しました。国王はそれと引き替えに略奪の特権を与えることがありましたが、オランダ人は海軍や地域首長の位階を与えることがありました。自分たちが海賊と呼んでいる人物と軍事面や地域支配において協力し、体制に取り込んだと言えます。

こうした協力の代償として、支配者は海洋移民に主に定住地を提供し、さらに税を免除しました。それから、海賊行為はよく支配者の側と移民との間で共同事業として行われました。支配者が船と必需品を用意し、移民のほうは人員を提供する訳です。獲得物は、交渉に基づき分割されました。また、海洋移民は常にある支配者と1対1の協力関係を結んでいたわけではなく、同時に複数の支配者に対して忠誠を誓う場合もありました。また、仕える支配者のある人物から別の人物へ変えることはさらに頻繁に行われていました。

この時代になると、むしろ国家と海洋移民の関係がむしろ相互依存的・互恵的となり、国家が常に移民を保護する関係ではなくなっていると思います。これは80年になってリアウやスカダナなどの有力国家が衰退し、多くの小国家が現れたことと結びついていると思います。

オランダ植民地政庁は、1820年代初頭から西カリマンタンに徐々に進出を始めます。この時期にオランダ人が強く協力関係を結ぶのが、「元海賊」と認識されていたラジャ・アキルです（Raja Akil ラジャ・ムサの息子）。彼は、先述のシアク人移民集団のこの時期のリーダーですが、オランダ政庁は彼を地域首長に任命し、海賊討伐を命じます。海賊に海賊討伐を依頼するというのは、その効果を期待するというよりも、自分たちの関与と予算を最小化する政策の一環であったと考えられるでしょう。

## オランダ植民地支配下の国家・在地住民・移民（1828年～）

1828年に、スカダナ王国の後継国であるマタン王国とオランダとの間で抗争が生じ、オランダがマトンの都に総攻撃をかけました。この遠征にはラジャ・アキルも協力し、支配者は内陸に逃亡しました。代わりにオランダは、ラジャ・アキルを、新たにスカダナ地域に設立したNieuw Brusselという国のスルタンに任命しました。ただ、この名前は現地では全く浸透せず、人々はこの国をスカダナと呼びました。

その後オランダ政庁は、沿岸貿易をボンティアナックとスカダナに集中させ、ほかの港を使わせないようにする政策を取りました。後にこれにクタパンも加わりますが、これらの港町は、海洋移民を今までと同様に受け入れ続け、移民が河川や沿岸部で貿易を展開しました。このときに公認されなかった港町のクブ、シンパン、クンダワンガンは衰退しました。1850年代の資料によると、クブではかつての海洋移民が農業を行っており、シンパンではかつての海洋移民であった人々が内陸部に移住して、在地のダヤック人との間で不平等貿易を行っているということが述べられています。

## おわりに

国家と在来住民と海洋移民の関係は時代とともに変化しました。様々な状況に対応して彼らが異なる関係を築くことが、この地域社会の歴史の展開で重要であったと私は考えています。15世紀にジャワ人が渡って来た頃から1760年頃までに、在来のダヤック人がムスリム支配者に従属するようになりました。支配者が対外貿易を独占したことが、ダヤック人が必需品を輸入に依存する関係をつくり、この従属構造を可能にしたと考えられます。

1760年代からは、海洋移民の時代になりました。中国・東南アジア貿易の発展が、商人や海産物採集技術を持つ集団の移住を促進しました。海賊としての経歴と軍事力は、フロンティアで冒険的な商業を行う移民にとっては非常に重要でした。国家支配者もその軍事力を利用する傾向があったため、両者の間に密接な関係が結ばれました。

1780年代以降は現地の中核国家が崩壊したこともあり、海洋移民の自立化が進んだと言えます。移民が定住した港町は自立化し、国家支配者と海洋移民の間で互恵的な関係が結ばれました。具体的には、貿易の促進と軍事力の提供が海洋移民の重要な役割となりました。

18世紀の末から東南アジア島嶼部の国家が小規模化したということが言われていますが、これは拡散型の貿易を行う当時の小規模海洋国家の特徴ではないかと私は考えています。これは、この時代になって東南アジアの主要な商品が大きく変わったためであると私は考えています。それまでの重要商品であった香料や高級木材は産地が限られ、その産地を支配する支配者も、希少な産品を取引する港を支配する国家も、貿易の独占によって強力になり得ました。ところが、この時代に重要となる輸出品とは、例えば燕の巣、籐、ナマコなど、各地で採取出来る産品となります。これらは生産の独占が非常に難しく、集荷の拠点もあちこちにつくられました。こうして貿易が拡散的に行われる状況では、海洋移民が重要な役割を果たす一方で強力な国家が生まれにくかったのではないかと私は考えています。

1820年代にオランダ植民地国家が西南カリマンタンに進出し始めると、当初は元海賊の移民も、その支配構造の中に組み入れられました。これはまだ脆弱であった植民地国家が、その行政基の地盤を、現地有力者によって補完させようとする試みであったと考えられます。1820年代末からだんだん植民地支配が強まってくると、海洋移民は居住地や生業を変えて、新たな状況に対応しているように思われます。

ダヤック人の生活は、スカダナ王国の設立や海洋移民国家との接触によって、大きく変容したと私は考えます。国家がダヤック人に寄生する一方で、ダヤック人はより外来の産品に依存するようになりました。

海洋移民は、特に18世紀末から19世紀はじめにかけて地域経済と地域政治において重要なアクターになりました。彼らの活動は1820年代末以降だんだん見えにくくなりますが、クタパンやクンダワンガンが今でも重要な港町であるのは、現在まで残る海洋移民の遺産と言えるでしょう。

海洋移民は極めて多様なルーツを持っていますが、19世紀前半までにマレー人と総称されるようになりました。現在西南カリマンタン沿岸部に住んでいるマレー人の多くは、おそらくこの時期の海洋移民と関連しているかと思われます。海洋移民の活発化は、貿易の発展と彼らの居住地の発達と結びつき、そして今日のいくつかの港町とマレー人の基盤を作ったと言えます。以上です。ありがとうございました。

## 質疑応答

**フロアA**：ダヤック人の立場に関してですが、1500年頃から1760年頃までの従属的な立場は、1760年以降に結局変化していったのでしょうか。また、エスニシティの境界に関する議論も非常に興味深いものですが、それに関しても18世紀以降に何らかの変化というものが見られたのかということをお聞きしたいと思います。

**太田**：ありがとうございます。私は海洋移民と国家との関係における変化について話しましたが、ダヤック人と国家の関係についてはあまり言及しませんでした。ダヤック人と国家の関係は、少なくとも私が今日扱った時代においては、それほど大きな変化があったとは感じません。海洋移民が河川貿易に参加したことで彼らがダヤック人と接触するようになり、彼らが以前の支配者と違うタイプの貿易をやったという情報はまだ見当たりません。おそらくそれまで続いていた不平等なやり方を踏襲したのだろうと考えさせる断片的な情報はいくつかありますが、あまりはっきり言えません。エスニシティの境界についても、私の読んでいる資料に限界があってあまり情報がないのですが、あまり大きな変化は見えていません。

**フロアB**：今日のお話の中でキーワードの1つは海賊のようです。海賊という用語は、現地の人たちが自称する言葉なのか、あるいはそうではない外来語、オランダやイギリスやあるいはフランスなどが言う排他的な概念、用語なのか。あるいは、太田さんの研究上の分析用語なのか教えてください。

**太田**：ありがとうございます。マレー海域でも海賊という語は基本的に他称ですが、それは現地で使われてないということでは決してありません。リアウにはブギス人王族によって19世紀にマレー語で書かれた『トゥファット・アルナフィス (*Tuhfat al-Nafis*)』という王朝史がありますが、ここでは海賊に「ロンパック (pelompok)」という語が使われています。「ロンパック」が単に「強奪する」とか「奪う」という動詞で、その行為者がロンパックです。ですから、字義的には海上で強奪するという意味はないはずですが、この語はほとんど海賊の意味で使われていると思われまます。

ただ、非常に興味深いのは同じ海賊行為を行っていても、王がそれを率いる場合、ロンパックと言いません。王は、「自らの従者たちの生計を支えるための活動を行う」と、その王朝史には書かれます。要するに誰が海賊を行っているのかが重要で、王が行う場合それは自らの従者を保護する正当な行為ですが、別の人物が行う場合、少なくとも王朝史を書いた王族は、それをロンパック＝海賊と呼んでいます。

しかしそのような現地の海賊概念も決して不変ではなく、時代とともに変化します。1820年代後半、30年代に入ってヨーロッパ人の影響力が強まると、リアウの王がヨーロッパ人、特にオランダ人に対して、「われわれは海賊鎮圧活動を行う」と積極的に言います。それによって自らが正当な支配者であることを主張し、オランダと協力関係を結ぼうとするのです。彼らも海賊の概念を変化させるわけですが、ただ変化というよりは、新たな関係に対応するためにオランダ人の持つ概念というものを取り込んで利用していると言えそうです。

**フロアC**：海洋移民という言葉が私にはよく分からないのですが、これは普通の言葉で言ったら何でしょう。同じような言葉があるのではないかと思うのですが、漂海民とは違うのですか。また英語では何というのですか。

太田：私はむしろ「移民」でもいいのではないかと思っていますが、その前の時代に来ていたジャワ人やマレー人と区別するためにこの語を用いました。前の時代の移民が国家を設立しダヤック人との支配関係を非常に重視した支配体制をつくったのに対して、1760年頃から来た移民はもっと移動も頻繁ですし、自分たちの国家をつくるだけでなく、現地のいくつかの国家と複数の関係を結ぶなど、それまでと違う社会構造をつくり出したと私は考えています。こうした集団を指すために、私は海洋移民という言葉を使っています。漂海民と言うと、海上で生活しているとか船の上で暮らしているという要素が強くないのでしょうか。私は今日の話はそれとはちょっと違うと思っております。

私が英語で書くときは *maritime migrants* という言葉を使います。他に *sea peoples* という言葉を使ったこともあります。直訳すれば海民でしょうか。これはオランダ人が当時 *strandbewoners* という語を使って、彼らにとっては独自の特徴を持つグループを呼んだことに対応させたつもりです。特にまだ定着した語があるとは思えませんので、私は *maritime migrants* あるいは *sea peoples* という語を使っています。

フロアC：海上でといったって、まったく海の上じゃないです。沿岸でしばらくそこにいて、また資源を求めて動くというわけですから、そうはあまり違わないように思うのですが、なぜそういう言葉が使われたのか疑問に思いました。太田さんの言葉で了解しました。

フロアD：Nieuw Brussel という、ベルギーの地名がこの地域に付けられたということですが、この頃オランダとベルギーの関係はどういうものであったのでしょうか。そして、ベルギーはアフリカに進出したと思うのですが、もしかしたらオランダ、ベルギーにとってのアフリカをこの時期のこの地域にあてたのか、もしヨーロッパの中で何か事情があったのなら教えてください。

太田：これは1820年代末の出来事ですので、まだベルギーが独立していなかったときの話です。ナポレオン戦争のあとオランダはしばらくフランスの占領下にあったのですが、そのあとヨーロッパにどのような政治体制を築くかについてウィーン会議でいろいろ話し合いがされます。その結果として現在のベルギーと現在のオランダを含めた地域が連合ネーデルラント王国として独立します。ですから、このときにはベルギーを含めたネーデルラントという国があったわけで、ベルギーとオランダという別の国家があったわけではありません。ですので、当時のオランダ人為政者は、自分の本国にある地名を持って来たこと認識していたでしょう。

フロアE：先ほど先生のおっしゃったダヤック人の従属的な地位ということに関してお尋ねします。外来品を求めて進んで従属したというほかに、ダヤック人側が何か別のメリットを考慮して関係を構築したと推測されるものがありますでしょうか。

太田：ありがとうございます。東南アジア各地には外来の支配者を受け入れる慣行があり、それは *stranger king* という概念で分析されることもあります。その場合には、現地でお互いに抗争していて、自分たちだけでは抗争を終わらせることができないので、むしろ強力な外来の支配者を受け入れたとされます。このパターンが当てはまるかと考えたことはあるのですが、必ずしも現地で抗争が続いていたという情報が見えません。ですので、今のところ輸入品の重要性ということ以上には、外来の支配者を受け入れる上で強い要素は見当たりません。他の要素についてもまだ考えていきたいと思っています。

近世から近現代にいたる海域世界の社会統合